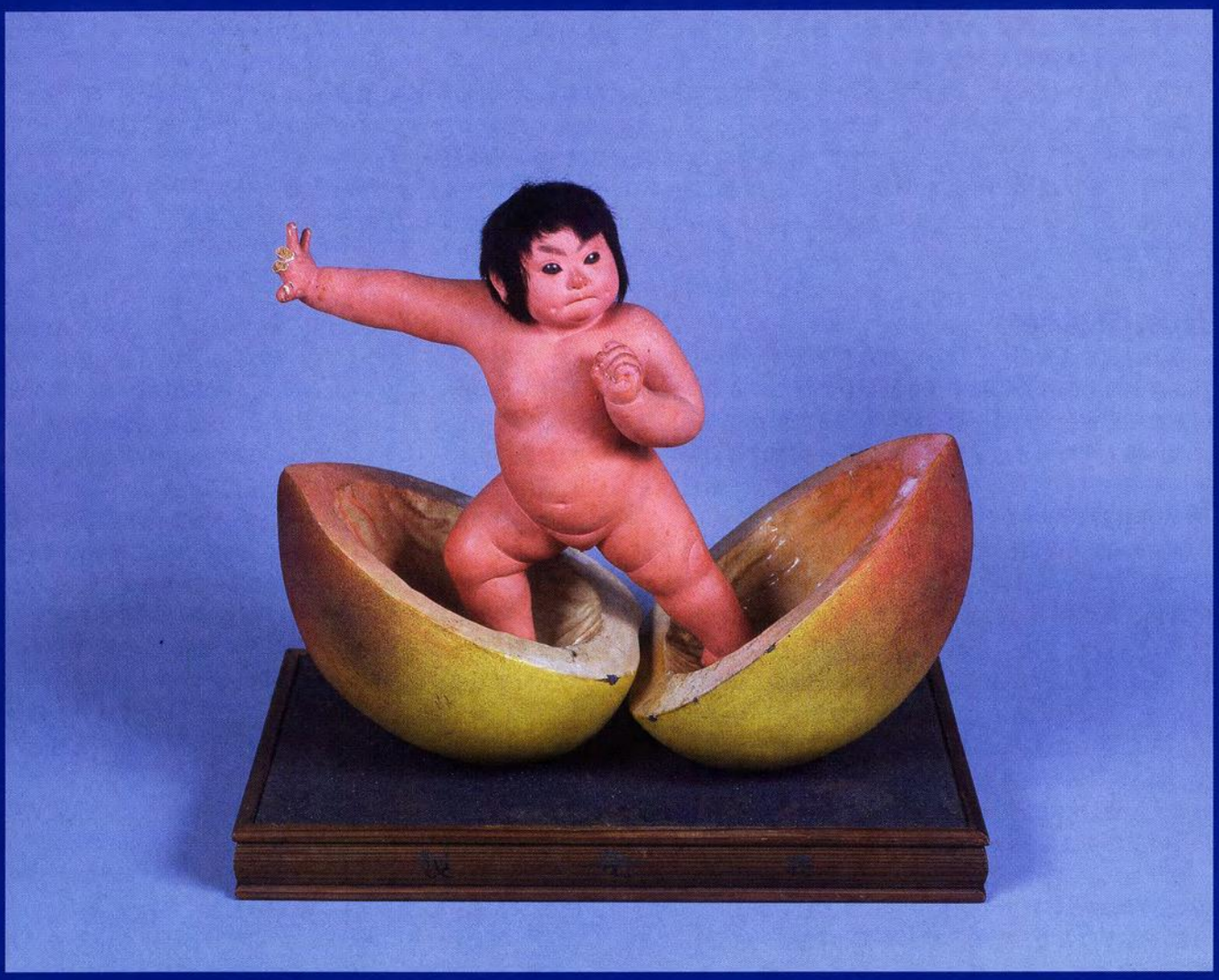
川越市立博物館

博物館だより

第41号



五月人形「桃太郎」

5月5日の「こどもの日」は、かつて「端午の節句」と呼ばれ祝われてきました。古来中国では、端午は5月初めの午の日を意味し、雨季に入るこの時期にヨモギや菖蒲などを門などに飾りました。ヨモギや菖蒲に邪気や疫病を祓う力があると信じられていたからです。これが古代の日本に伝えられ、宮中を中心に端午の節会が行われるようになりました。12世紀頃成立した「年中行事絵巻」には、5月5日の行事として「騎射」と「菖蒲の節会」の場面が描かれています。その場面には、菖蒲を頭に巻き、菖蒲刀を腰に挿して遊んでいる子供たちや、軒先に挿された菖蒲などが描かれています。

やがて江戸時代となり武家社会が確立すると、菖蒲が武道を重んじる「尚武」と通じることから、男児の節句として盛んに祝われるようになりました。子供のいる家では端午の節句に外幟を立てて、菖蒲兜の上に小さな人形をのせた「兜人形」と呼ばれるものを飾りました。この兜人形が今日の五月人形の始まりと考えられています。

五月人形には、源為朝や源義経、加藤清正など武勇に優れた人物が多く取り上げられましたが、昔話の主人公である金太郎や桃太郎なども題材に選ばれました。写真の五月人形「桃太郎」は、桃が割れて中から元気の良い桃太郎が出てきた場面をとらえています。顔の表情や手足の筋肉の付け方などに、見事な人形作りの技を見て取ることができます。この作品は、二代平田郷陽(1903～1981)が大正13年(1924)に製作したものと似ていることから、同氏の作と考えられていましたが、平成14年に横浜人形の家で開催された「人間国宝への道～平田郷陽・人形職人から芸術家へ～」では、初代郷陽(1878～1924)の作とされました。

地口行灯について

祭りの日の夕暮れ、社寺の境内や参道などには、ろうそくのあかりに映し出された色鮮やかな行灯の絵が浮かび上がります。一度ならずこうした光景を目にした方はいらっしゃるのではないでしょうか。

箱型の木枠に和紙が張られているこの行灯は、地口行灯（じぐちあんどん）と呼ばれています。行灯の表面の絵は一般に地口絵と呼ばれ、人物や風景、事象などの絵が描かれ、加えて今の私たちにはなじみの薄いくずし字も記されて独特の風情を醸し出しています。

この地口行灯は、祭りに欠かせないものの一つとして、今に至るまで受け継がれてきました。祭りの期間のみ用いられるため、祭りが終わるとその役を終え、翌年の祭りには新調されます。現在でも各地の祭りに見ることができますが、年々その数は減ってきています。

このような中、絵筆を握り続けて、川越はもとより坂戸や東松山、川島など周辺地域の地口絵の製作に携わっているのが土屋トヨさんです。トヨさんは先代の房吉さんの跡を継ぎ、現在も新しい地口絵を描き続けています。

地口行灯と地口絵

地口行灯の「地口」とは、ことわざや成句、歌舞伎のセリフなどをもじった、駄洒落や語呂合わせのような一種の言葉遊びです。文句の一部を同音もしくは似た響きの別語に言い換えて作ります。例えば、「鯉の滝のぼり」を「小犬刷毛のぼり」としたり、「山から小僧が泣いて来た」を「釜から甘茶が沸いて来た」としたりする具合です。

地口の詳しい歴史は明らかではありませんが、享保年間（1716～1736）頃に江戸で流行したとされています。人情や世相、風俗を多く口語を用いて詠んだ川柳も明和年間（1764～1772）頃から隆盛を迎えますが、江戸時代中期には、さまざまな形で機知に富んだ表現を行う土壌が育まれていたことが窺えます。江戸後期の随筆『守貞漫稿』（喜田川守貞著）では、「京坂ニテ口合（くちあい）、江戸ニテ地口」の項で、地口の事例が取り上げられています。幕末、明治となっても、地口絵手本類の出版物などは多数刊行され、庶民にとってますます地口は浸透していったことがわかります。

こうした地口を軽妙洒脱な絵とともに紙に描いて張ったのが、「地口行灯」です。祭りの折などに装飾として用いられるようになり、宝暦・明和年間（1751～1772）には盛行していたといわれています。

地口行灯に描かれた絵は、「地口絵」や「とうろう絵」などと呼ばれ、地口に合わせて武者姿・芸者姿・子供など人物を中心に海岸・富士山・町並みなどの風景、提灯・釜・やかん・人力車などの生活関連用具、そば・饅頭・餅などの食べ物、朝顔・桜・菊などの植物、猫・鶴・魚などの動物などさまざまな絵柄がモチーフとなっています。また、絵の上部にはよく波型などの線が描かれており、これは製作者の特徴を示すものとなっています。

地口行灯の取り付け風景（大袋新田・弁天様）

地口行灯は、現代の私たちにとって書かれた文字がくずし字でなじみが薄いことに加え、当時の時代背景や流行、歴史上の人物のいわれなどを知らないと何をもじったのか理解しにくい面があります。しかし、絵そのものの表現が豊かで興味を引くとともに、内容を知れば、当時の人々の考えや生活の一面を知る貴重な機会にもなります。

川越においては、地口絵のことを「とうろう絵」と呼び、この関係からか地口行灯そのものも「とうろう」と普通呼んでいます。

地口行灯の形状は、他所と同様に箱型の木枠に和紙を張ったものです。角材を用いて作った高さ34㎝程の木枠に、正面には地口絵を糊で張り、裏面と両側面には無地の和紙を張ります。底部には１本の梁を通し、真ん中にろうそくが立てられるように釘が出ている作りとなっています。側面に張られた和紙は、そのまま無地の場合もありますが、地域によっては「五穀豊穣」「交通安全」「家内安全」などの願い事を記したり、子供たちが自由に目標や願い、名前などを書くこともあります。

この地口行灯は、天王様や氏神様など市内各地で行われる大小さまざまな祭りの際に、境内はもちろんのこと、参道や町内の主要道路沿いなどに整然と掲げられます。

大抵の地口絵は祭りごとに新調して張り替えられていますが、場所によっては、破れたり、汚れたりする都度に新調するところもあるようです。川越市南部の増形地区のように、地口絵を祭り終了後に翌年まで保管しておき、お札代わりの花を作る際にこの地口絵を丸めて再利用しているケースもあります。

地口絵の製作に関しては、絵心があれば誰でも描くことは可能です。明治時代、川越氷川神社の神官を務めた山田衛居（もりい）が記した『朝日之舎日記（あさひのやにっき）』には、「終日地口之画かく」との記述があり、神社の関係者によっても描かれていたこ

とがわかります。

しかし、一度に多量の注文をこなすには限度があり、提灯屋や傘屋、絵馬屋、人形作りなどの生業に関わる職人が本職の合間に筆をとる場合が多いようです。これは、地口行灯が正月の門松や三月の雛人形のように入用の時期が限られた際物（きわもの）の類であるため、地口絵だけで生計を立てるのに難しい面があるからです。

地口行灯の需要が減っている中、今なお地口絵を製作している職人の数は大変少なくなっているのが現状です。

川越の描き手―土屋トヨさん―

川越市大手町に店を構える津知屋提灯店。ここで現在も地口絵を描き続けているのが土屋トヨさんです。

トヨさんは大正10年に土屋房吉さんの長女として生まれました。手に職を持ったほうがよいとの両親の勧めもあり、裁縫学校を卒業後は、着物・羽織・袴・道行などの仕立てにしばらくの間携わっていました。その後結婚してからは、家業の提灯作りを手伝いましたが、どちらかといえば、房吉さんが仕事に打ち込むのを陰で支えていたほどであったといいます。

ところが、昭和58年、本業の提灯作りはもちろんのこと、地口絵の製作でも第一線で活躍していた房吉さんが亡くなりました。房吉さんの仕事は、地口絵をトヨさんが継ぎ、提灯をトヨさんの長男一男さんが継ぐこととなりました。トヨさんが地口絵を受け継ぐにあたっては、それ程抵抗感がなかったそうです。それまでほとんど描いたことがなかったものの、元々絵に興味があったためです。以来、本格的に製作に取り組み、今では川越唯一の地口絵の職人として活躍されています。

トヨさんが受ける年間の注文数は、平成７年は3100枚、平成12年は2302枚、平成13年は2472枚、平成14年は1820枚で、最近の３年間を平均しても約2200枚にも及びます。１件あたりでは、10枚20枚といった小口の注文が多いのですが、中には200枚以上の大口もあります。

注文先をみると、川越市内を始めとして川島町、吉見町、大井町、三芳町、東松山市、所沢市、鶴ヶ島市、坂戸市など広範囲にわたっています。毎年ほとんどが決まった場所からの注文ですが、時には熱心な愛好家からの依頼に応じて製作することもあります。また、注文の時期については、６月から10月にかけて、特に夏祭りの集中する７月が大変多くなっています。

こうした年間多量の注文を受けながらも、１枚１枚手作業で仕上げるため、トヨさんは毎日少しずつ絵を描きためています。新しい年を迎え、小正月を過ぎてから描き始め、春夏の書き入れ時に備えます。現在は無理をしないようにしていますが、それでも製作に没頭すると深夜に及ぶこともあるそうです。

地口絵（とうろう絵）の製作

地口絵の製作では、極めてまれにオリジナルのものを描く場合もありますが、先代からの伝統である「なぞり」という手法を用いています。このなぞりとは、先代が残した地口絵の手本に和紙を重ね、描かれた絵柄をなぞって写し取るというものです。注文が集中した忙しい時期でも、素早く数多くの地口絵を仕上げるための技術として使われました。

土屋家には、江戸時代の中期頃から大正に至るまで、歴代の職人たちが用いてきた手本が伝わっており、その数は2000枚を超えています。書かれている文言に関しては、地口に加えて川柳が多いという特徴があります。

手本をみると、一見して情緒溢れる筆運びを感じることができます。そして、ユーモア豊かに、世相や流行、ものの考え、歴史事象などあらゆることに関心を持ち、地口絵に仕立て上げる職人の息遣いが伝わってきます。

このように膨大な数の手本の中から、トヨさんは注文主の要望に応じ、またお任せの場合は時宜にあった題材を選んで使っています。

使用する手本を決めると、まず最初になぞりをします。選んだ手本の頁の上に和紙を載せ、墨で輪郭をなぞっていきます。この時、使用する紙は半紙判と美濃判の２種類の和紙があり、絵の向きについても縦横があるため、それぞれ注文に合わせて使い分けをします。

そして、地口などの文言を書き入れます。時折、和紙の大きさや向きによって手本に書かれた文字の位置では収まりきらない場合がありますが、その微妙なさじ加減は長年の感覚でバランスよく字を置いていきます。こうして、ここまでの過程のものを100枚から200枚まとめて描き、紙

土屋トヨさん

地口絵手本

地口絵に書かれる地口・川柳などの一例

・鶴はせんべい亀はまんじゅう（鶴は千年亀は万年）
・踊るもの久しからず（奢れる者は久しからず）
・盆と塩鰹（盆と正月）
・面盗みの神（縁結びの神）
・かに井戸の天神（亀戸の天神）
・書に交ばかたくなる（朱に交われば赤くなる）
・棚だ雪平（真田幸村）
・ぱんと聞いたか桜もち（何と聞いたか桜丸）
・釜喰いないて三つ食えるとは（からくれないに水くくるとは）
・鍬二丁伊勢吉のはみがき（小網町伊勢吉の歯磨き）
・鯉引くときぞ浮きははげしき（声聞くときぞ秋はかなしき）
・下女いわく鼻高きが故に貴からず（山高きが故に貴からず）
・有合の小さく見えし茶碗より盃ばかり良きものはなし（有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし）
・立志伝遊んだことは書いてない
・田毎より葉ごと月持つ芋畑
・焼餅を焼くたび胸を焦がしてる
・うたた寝の顔へ一冊屋根をふき
・かんざしは忠と不忠の間に落ち
・金だらい落ちてどろぼう飛び上がり
・きざなやつ我慢で買った青切符
・大吉のおみくじが出たと又拝み
・一寸の草にも五分の春の色
・籠の松虫風鈴と打合せ
・汗出てやっと御祭りらしくなる
・政府の五分利はごもっとも
・和服に帽子なら洋服に島田です
・白河夜船頭が火鉢へつきました
・能の見物舟をこぐ隅田川
・亭主を一本参らせそう落とし文

（字は読みやすいように適宜直しました）

面の上部には朱線を２本入れておきます。この線は、他所の例では波線が多いようですが、土屋家の場合は棒線になっています。

続いて、色付けを行います。15、6色程の水彩絵の具で、大小さまざまな筆や刷毛を使って彩色をします。絵柄の模様や色使いは、その時の気分によって変わるため、同じ絵柄でも仕上がりの雰囲気は随分異なったものになります。この色付けでは、ろうそくや電球などの明かりが入った状態を常に考え、色の濃淡にも注意をしているとのことです。

そして最後に、先程のなぞりの段階で入れた2本の朱線の内、下の線にピンク色の線を重ねて出来上がりとなります。

地口絵の製作に際しては、昔からのなぞりという手法を用いながらも、色使いや文字の配置など多くの工夫を重ねて１枚１枚丁寧に作品を完成させています。そしてこの他にも、１件ごとの注文の中で似たような絵柄が重ならないようにしています。人物に関して男女の偏りが無いようにするなど、細やかな心遣いも欠かせません。

本格的な地口絵の製作に携わったのは父の跡を受けてからで、独学で技術を習得されたとのことですが、とてもそのようには思えない職人技を十分に発揮されています。穏やかな語り口の中にも、父房吉さんを始めとした歴代の職人たちの伝統をしっかりと受け継いでいる気骨を感じさせる佇（たず）まいが印象的でした。

（付記）本稿をまとめるにあたり、土屋トヨ氏に御協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

〔主な参考文献〕

岡村昌夫「江戸の残照－地口行灯の世界－」『人形玩具研究―かたち・あそび―』日本人形玩具学会誌 Vol.12

大久根茂「とうろう絵とちょうちん作り」　埼玉県立民俗文化センター

（学芸係　峯岸太郎）

「川越の職人」コーナー

提灯師

城下町川越の伝統的な職人の仕事場を再現する「川越の職人」コーナーでは、毎年１回の展示替えを行っています。

平成16年10月頃までの展示

提灯は、ろうそくを用いた照明具として古くから使用されていました。最初は木枠に紙を張ってぶら下げるだけのものでしたが、その後籠に紙を張った籠提灯が現れ、天正・文禄年間（1573～1596）に蛇腹式で折り畳みのできるものとなり、その後「ぶら提灯」や「弓張り提灯」など、様々な形の提灯が作られるようになりました。

川越でも、慶応３年（1867）の「武州入間郡川越町諸色明細帳」には「提燈師四人」の記載があり、江戸時代から提灯師がいたことが分かります。今回の展示に際し、市内大手町、津知屋提灯店の現当主土屋一男さんにお話を伺いました。一男さんは、小さい頃から提灯師であった先代房吉さんの仕事を手伝い、その技を覚えたそうです。房吉さんの代までは、竹ひごで蛇腹を作り、そこに和紙を張って、それに絵柄を付けていましたが、現在では、針金に和紙を張った素地を問屋から仕入れています。それに家紋や絵柄を描いてから十化（上下の枠）などの付属品を取り付け、最後にアマニ油を提灯につけます。それを天井などから吊るし、乾くまで干します。

電灯の普及とともに、照明具としての提灯は役割を終え、需要は少なくなりましたが、現在でも、盆提灯や祭り提灯の製作や修理などの注文は多いそうです。川越市内では、３軒の提灯屋が提灯を作り続けています。津知屋提灯店では、息子の潤一さんが後継者として、一緒に提灯を作っていました。私がお話を伺っている間にも、お客さんが提灯を持って修理を依頼していました。各家に代々受け継がれた提灯を直して使い続ける伝統がある限り、提灯は作られ続けていくのだと思いました。

今回の展示に際し、御協力いただいた土屋一男さん、潤一さんに心よりお礼申し上げます。

～今年度の土曜体験教室から～

はじめに

博物館では、毎月第２、４土曜日に土曜体験教室を実施しています。体験内容は、ものづくりやよろいの着装、歴史クイズなど、多種多様です。ここでは、今年度行った土曜体験教室について紹介します。

今年度の土曜体験教室のプログラムは、以下のとおりです。例えば、４月実施の「博物館マップラリー」と３月実施の「博物館フォトラリー」は、クイズに答えるものです。５月実施の「コマをまわそう」と12月実施の「火おこしに挑戦しよう」は体験、７・８月実施の「和紙を作ろう」と１月実施の「たこを作ろう」はものづくりです。

土曜体験教室プログラム

午前10時～11時30分と午後1時30分～3時30分

（☆は事前に申込みが必要です。）

実施日	内　　容
4月12日	博物館マップラリー
4月26日	拓本をとろう
5月10日	コマをまわそう
5月24日	よろいを着てみよう
6月14日	あいぞめをしよう（☆6/6～）
6月21日	七夕飾りを作ろう
7月12日	あいぞめをしよう（☆7/4～）
7月26日	和紙を作ろう（☆7/13～）
8月 9日	和紙を作ろう（☆8/1～）
8月23日	竹とんぼ･紙とんぼを作ろう
9月13日	竹とんぼ･紙とんぼを作ろう
9月27日	切紙・折り紙を楽しもう
10月11日	たてたてよこよこしましまもよう
10月25日	たてたてよこよこしましまもよう
11月 8日	わら縄作りをしよう
11月22日	影絵劇を楽しもう（☆11/5～）
12月13日	火おこしに挑戦しよう
12月20日	お正月飾りを作ってみよう
1月10日	たこを作ろう
1月24日	たこを作ろう
2月14日	昔の単位で、はかってみよう
2月28日	昔の単位で、はかってみよう
3月13日	昔のおもちゃ作り
3月27日	博物館フォトラリー

1　博物館マップラリー（４月実施）

館内の地図を持って指示された場所へ行き、与えられたクイズに答えて、館内を回ります。おまつりコース、算数コースなど数種類のコースがあります。そのコースをクリアすることで、川越の歴史を学んでいくというものです。クイズをとおして、楽しみながら川越の歴史に親しむことができます。答えられないときは、館内の解説員からアドバイスがもらえます。解説員からアドバイスやヒントをもらうことで、館内の様子が理解でき、川越のことがよくわかるようになります。昨年度は、市内中学校の英語の先生や川越市教育委員会のＡＥＴの協力を得て、博物館マップラリーの英語版も実施しました。ジェスチャーや絵カードのヒントを交えた簡単な英語のクイズに選択方式で答えていくという、小学生でも参加できるものです。

おまつりコース

土曜体験教室
博物館マップラリー（もんだい・かいとうようし）

答え（ひらがなでこたえてね！つぎにしかくの中の字をならびかえてことばをつくろう！）

1　このもけいは、江戸時代おわりごろ（やく150年前）の川越のようすをあらわしています。川越城のやぐらのほかに、高いたてものがあります。それはなんでしょう。　　1、○○○□○

2　このもけいは、むかし、川をつかって舟で川越から江戸まで荷物をはこんでいた河岸場（舟で荷物をつみおろした所）の様子をあらわしています。この荷物をはこんだ川はなんという川でしょう。　　2、○○○○○□

3　この舟は、2の川で荷物を運ぶ時につかわれたもののもけいです。なんという舟でしょう。　　3、川越□○○

4　このびょうぶには、お城が二つえがかれています。川越城ともう一つはどこでしょう。　　4、○○□○○

5　「河肥」（かわごえ）という文字が書かれているかねは、いまは、どこのお寺にあるものでしょう。　　5、○○○○○□

ヒント：川越まつりはここのお祭りだよ。　　答え：□□□□□じゃ

2　よろいを着てみよう（５月実施）

土曜体験教室の中でも人気の高いものです。今年度は、雰囲気を高めるために本丸御殿の中庭で実施しました。参加者は子どもだけでなく大人の方もいます。「川越藩火縄銃鉄砲隊」の方々の御協力をいただき、子ども用のよろいと大人用のよろいを用意します。

足袋を履き、よろいを巻き、帯で締めていくうちに参加者は、だんだんと気持ちが盛り上がってきます。「侍らしくなってきたよ、かっこいいね」などと声をかけ、心を込めて着せてあげます。着装が終了すると、姿身の鏡を使って自分の姿を見せてあげます。最後に記念写真をとります。

１日で約100人ほどの人によろいを着せるのですから、職員だけでなく御協力をいただく方々も大変な作業です。

3　あいぞめをしよう（6・7月実施）

まず、写真を使って藍とはどんなものかを紹介し、あいぞめの工程を簡単に説明します。

そして実際のあいぞめ体験に進みます。ハンカチを数回折り、そこにビー玉やわりばしを使って輪ゴムでしばっていきます。御協力をいただいた「川越唐桟手織りの会」の方の話では、ハンカチの折り方、ビー玉やわりばしのしばり方の具合によって偶然にできる模様がいいのであって、意図的に模様をねらうとうまくいかないとのことです。会の方々からは、参加者に教えながらもさらに自分達の技術を向上させようという気概が感じられます。

次は藍の液にハンカチを浸す作業です。ゴム手袋やエプロンをして藍が付着しないようにします。藍が皮膚に付くとなかなか落ちません。服にも付かないようにします。体験をとおして、藍の深い色や藍の独特のにおいに出会うことができます。

4　竹とんぼ・紙とんぼを作ろう（8・9月実施）

今年度新規に取り入れたもので、企画の段階からボランティアの方々と職員が協力し、準備を進めました。竹を薄く裂いて竹とんぼの形を大まかに作り、当日は参加者が紙やすりで削るだけで済むようにしました。参加する子どもたちがナイフを使って怪我をしないように、また、時間内で終了できるようにという配慮からです。

反面、子どもたちにできるだけ多くの工程を体験させ、自分で作り上げたという気持ちを持たせたいということもあります。どこまで準備しておいたらよいのか、迷うところです。そこで、竹とんぼ作りが難しいと思われる子どものためにボランティアの方が、紙とんぼを考えてくれました。紙とんぼでは、厚紙の羽が軸を中心にしてうまく回るように、工夫を凝らしました。

参加した子どもたちは、高く舞い上がる様子に歓声をあげて喜んでいました。

5　そのほかの土曜体験教室

ここ数年、埼玉大学教育学部の田村研究室の大学生による企画を土曜体験教室に取り入れています。今年は昨年に引き続き、「たてたてよこよこしましまもよう」を行いました。短冊に切った紙を縦・横に交互に組み合わせていくもので、織物の基本を理解してもらう体験です。これには、川越は昔から織物が盛んだったことを伝えたいというねらいもあります。

「わら縄作りをしよう」と「お正月飾りを作ってみよう」では、地域の方の御協力をいただきました。わらに接したことのない子どもたちも上手に作り上げました。そして、終わりに見せてくれたわら縄作りの名人技には、参加者から感動の声が上がりました。

「影絵劇を楽しもう」では、「劇団夢の箱」の方々に影絵を上演していただきました。毎年違った演目を考え、自作の影絵を用意していただいています。

「たこを作ろう」では、準備の段階からボランティアの方々に御協力をいただきました。

また、博物館周辺の子どもたちには、「子どもボランティア」として、土曜体験教室の受付や後片付けなどを手伝ってもらいました。

おわりに

この土曜体験教室は、学校週5日制により増えた子どもたちの休日の過ごし方を充実させるというねらいがあります。

当館の土曜体験教室は、学校が完全週５日制になった平成14年度に実施回数を月１回から２回へと増やしました。昨年度までは、館内の子ども連れの観光客がたまたま参加するということが多かったのですが、最近ではこの土曜体験教室を目的に来館される方も増えています。体験内容によっては、開始時刻にはすでに行列が出来ていることもありました。土曜体験教室の存在が、少しずつ子どもたちに浸透してきた成果と思っています。これからも楽しい体験をたくさん提供できるよう、内容の充実に努めていきます。毎月、「広報川越」に土曜体験教室の案内を掲載していますので、ご覧ください。また、土曜体験教室だけでなく、「子ども博物館教室」や「昔の遊び」など他の子ども向けの催物もたくさん開催しています。多くの子どもたちの参加を待っています。親子での参加も大歓迎です。

（教育普及係）

第23回企画展

刀工 藤枝英義とその時代

平成16年3月27日㈯～5月5日㈬

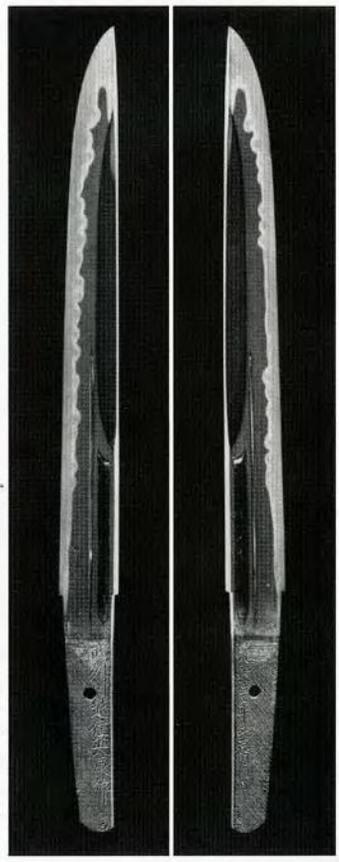
特別展示室の展観

幕末は、戦国時代とならんで、たくさんの刀剣が製作された時代です。各地の鍛刀場では幾多の刀工が槌音を響かせ、多くの名工が輩出しました。また、各藩は腕のよい刀工をお抱え鍛冶として召し抱えました。この時代の刀は刀剣史上「新々刀」と呼ばれています。

新々刀鍛冶興隆の理由として、開国を求める外国船の脅威・将軍家の後継をめぐる内政の混乱などの社会不安、勤皇思想の高揚が挙げられています。

川越藩では、天保年間（1830～44）に上野国の刀工、玉鱗子英一（てるかず）を召し抱えました。その子英義（てるよし）は、父に鍛刀の技を学んだ後、細川正義（まさよし）の門に入り、「当今江戸無類の上手也」と賞されるほどになります。嘉永6年（1853）には、川越藩工となり、藩の武備増強の政策に応じて、刀・薙刀・長巻それぞれ200振を製作しています。

この展覧会では、川越藩工である藤枝太郎英義とその一門の作刀を通して、幕末という激動の時代を刀剣史上から見直してみたいと思います。



川越市指定文化財
●短刀　銘　武州川越住英辰作／元治二年丑四月日
英辰（てるとき）は英義門下の刀工です

----- 利用の御案内 -----

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館（観覧）券		
				博物館美術館	博物館・本丸御殿蔵造り資料館	博物館・本丸御殿蔵造り資料館・美術館
一般	200円（160円）	100円（80円）	100円（80円）	300円	300円	450円
大学生高校生	100円（80円）	50円（40円）	50円（40円）	150円	150円	220円

●（　）内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合。

◆開館時間　午前9時から午後5時まで（ただし入館は4時30分まで）

◆休館日　月曜日（休日は除く）、毎月第4金曜日（休日は除く）、休日の翌日（土・日曜日は除く）、年末年始（12／28～1／4）、館内消毒（6月下旬予定）、特別整理期間（12月中旬予定）

●開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様。
（館内消毒・特別整理期間は、博物館のみ休館）

交通案内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス　「札の辻」下車徒歩8分

・御来館の際は、なるべく電車・バスを御利用下さい。

発行日　平成16年3月15日　　発行　川越市立博物館
〒350-0053　川越市郭町2丁目30番地1　☎ 049-222-5399
FAX 049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています